

自然体験活動が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響

The Effect of Nature Experience Activities on University students “Fundamental Competencies for Working Persons”

徳 田 真 彦¹⁾

Masahiko TOKUDA

安 原 政 志²⁾

Masashi YASUHARA

粥 川 道 子¹⁾

Michiko KAYUKAWA

佐 藤 悦 子³⁾

Etuko SATOU

1. 緒 言

近年の社会は、グローバル化の時代とも呼ばれ、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、もの、情報の国際的移動が活性化している。情報通信技術の進展は、地理的環境に関わらず、必要とする情報を迅速に入手することが可能になり、人々の興味や関心を広く豊かにすることに資する一方で、長時間情報機器に向かい合う事や、情報機器を通じた会話が増加することによって、人間関係の希薄化や真の生活体験・自然体験の不足を招来し、心身の健康に様々な影響を与えるなどといった事が懸念されている。実際に経済産業省が企業に対して行った、「学生に不足していると思う能力要素」の回答では、一般教養や語学力、パソコンスキルなどの知識・技術に関する項目ではなく、主体性、コミュ

ニケーション能力、粘り強さなどの人間性やソーシャルスキルに関する項目が上位に挙げられている¹⁾。グローバル化の進む一方で、それに反するように、必要とされる能力要素が育まれていない現状がある。

これらの現状を受け経済産業省は、平成18年に「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」を示している²⁾。さらに具体的な能力因子として、「前に踏み出す力」(一步前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力)、「考え抜く力」(疑問を持ち、考え抜く力)、「チームで働く力」(多様な人々とともに、目標に向けて協力する力)の3つの能力を示している(図1)。社会人基礎力は、これまで自然に身につく力とされてきたが、社会状況の変化により、身につく機能が低下していることが危惧され、より意識的な育成を行うことを目的に定義された。

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 特定非営利活動法人自然教育促進会

3) 大雪山倶楽部

キーワード：自然体験活動、社会人基礎力、大学生、満足度、課題価値

今日では、大学生や社会人に必要な力として、大学教育の指針や企業の求める人物像の明確化といった目的で扱われている。

社会人基礎力を育成する一つ的手段として、キャンプに代表される、自然体験活動が挙げられる。自然体験活動による社会人基礎力の育成に関する研究はいくつか見られ、それらを概観すると、調査対象のほとんどは大学の野外実習参加者であり、社会人基礎力に対する自信が高い群の方が、低い群に比べ積極的なストレスコーピングを行うことや³⁾、前に踏み出す力、考え抜く力の育成に効果が見られたこと⁴⁾、継続的なキャンプへの参加が社会人基礎力の育成に効果的であることが示唆されている⁵⁾。

以上、野外教育分野における社会人基礎力を扱っている研究は、非常に少ないものの、自然体験活動による育成効果が報告されている。しかしながら、十分に明らかになっているとは言えず、未だ不明瞭な部分が多く残されているのが現状である。現在、多くの大学で社会人基礎力の育成が叫ばれており、急務な課題として社会人基礎力育成に関する様々

な取り組みがなされている^{6) 7) 8) 9)}。その一つに野外教育を手法とした実習活動が挙げられ、実習活動における社会人基礎力の変容をより詳細に明らかにしていくことは、今日の大学における課題の解決の一助となると考えられる。

そこで、本研究では大学野外教育実習参加者を対象に、自然体験活動が社会人基礎力の変容に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1. 調査対象及び手続き

本研究の調査対象は、200X年9月4日から7日、9月8日から11日のそれぞれ3泊4日で行われたA大学野外教育実習に参加した111名を対象とした。調査実施に先立って、実習責任者に調査協力を依頼し、調査承認を得た。さらに調査対象者には調査に関する説明を行い、調査協力の同意を得た。調査は、実習初日の集合時 (pre)、実習最終日の解散前 (post)、実習終了約1ヵ月後の実習ふり

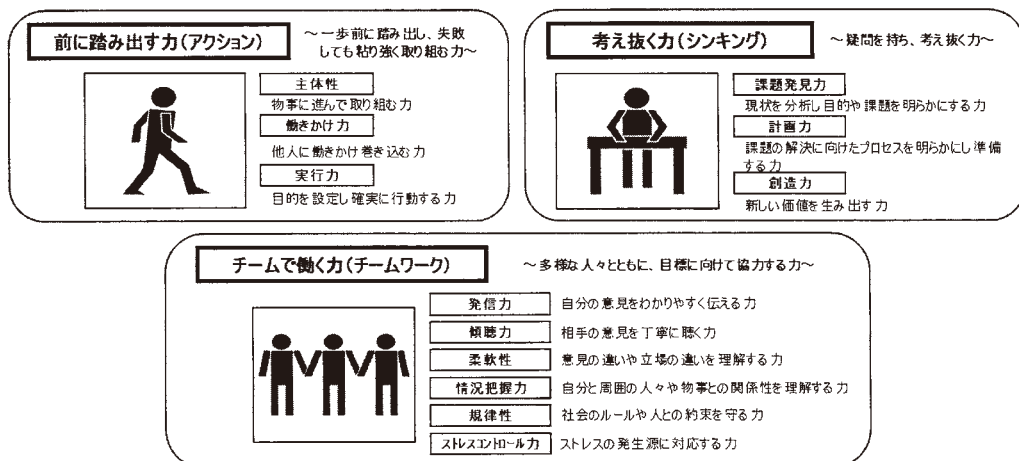


図1 経済産業省が示す社会人基礎力

かえりの時間（post1）の計3回実施し、その場で回収した。分析対象者は、データの欠損のあった14名を除いた98名であった（有効回答率84.5%）（表1）。

2.2. 実習の概要

当該実習は、キャンプ生活を通して行われる共同生活や挑戦、協力など、個人・グループでの様々な体験を通して、社会人に求められる基礎的な資質・能力の育成を目的に実施されている。具体的には、（1）様々な活動や課題にグループで挑戦する事で、グループにおける自分の役割を発見する。（2）使命感・責任感を自覚し社会性やコミュニケーション能力の向上を図る。（3）主体的・積極的に行動する態度や意識を身に着ける。（4）

表1 分析対象者

	男	女	計
2年生	78	16	94
3年生	3	0	3
4年生	1	0	1
大学院	0	0	0
			98

自然の素晴らしさや大切さなどの環境保全意識を身に着ける。（5）野外活動に関する基礎的な知識や技術を習得する、という5つの目標が設定されている。

当該実習は3泊4日の期間全てテント泊で、最終日の昼食以外、すべて野外炊事を行っている。そういった基本的な野外生活技術を身に着けるプログラムのほか、集団凝集性の向上を主たる目的としたキャンプファイヤーや

表2 野外教育実習スケジュール（上：前半,下：後半）

1日目 午前：晴 午後：曇 夜：雨	2日目 午前：曇 午後：曇 夜：曇	3日目 午前：雨 午後：曇 夜：雨	4日目 午前：晴 午後：晴 夜：晴
時間	時間	時間	時間
6:00	6:00	6:00	6:00
7:00	7:00	7:00	7:00
8:00	8:00	8:00	8:00
9:00	9:00	9:00	9:00
10:00	10:00	10:00	10:00
11:00	11:00	11:00	11:00
12:00	12:00	12:00	12:00
13:00	13:00	13:00	13:00
14:00	14:00	14:00	14:00
15:00	15:00	15:00	15:00
16:00	16:30	16:00	16:00
17:00	17:00	17:00	17:00
18:00	18:30	18:00	18:00
19:00	19:00	19:00	19:00
20:30	20:00	20:30	20:30
21:30	21:00	21:00	21:00
22:30	22:00	22:00	22:00
プログラム	プログラム	プログラム	プログラム
起床・朝の集い	起床・朝の集い	起床・朝の集い	起床・朝の集い
朝食作り・朝食	朝食作り・朝食	朝食作り・朝食	朝食作り・朝食
大学集合・アンケート・出発	ASEプログラム	レクリエーション大会	撤収作業 清掃活動
バス移動	昼食	昼食	昼食
キャンプ場到着・開講式	ASEプログラム	サンゴの滝登山	最終ふりかえり
写真撮影・アイスブレイキング	夕食作り	沙流川温泉・休憩	閉講式・バス出発
テント・タープ設営	夕食・片付け	夕食コンテスト	バス移動
ピーニング	夕食・片付け	スタンツ・全体ふりかえり	大学到着・アンケート・解散
夕食作り	入浴	班別ふりかえり	
班別ふりかえり	班別ふりかえり	就寝	
就寝	就寝		

1日目 午前：晴 午後：曇 夜：雨	2日目 午前：小雨 午後：曇 夜：晴	3日目 午前：曇 午後：雨 夜：晴	4日目 午前：晴 午後：晴 夜：晴
時間	時間	時間	時間
6:00	6:00	6:00	6:00
7:00	7:00	7:00	7:00
8:00	8:00	8:00	8:00
9:00	9:00	9:00	9:00
10:00	10:00	10:00	10:00
11:00	11:00	11:00	11:00
12:00	12:00	12:00	12:00
13:00	13:00	13:00	13:00
14:00	14:00	14:00	14:00
15:00	15:00	15:00	15:00
16:00	16:30	16:00	16:00
17:00	17:00	17:00	17:00
18:00	18:30	18:00	18:00
19:00	19:00	19:00	19:00
20:30	20:00	20:30	20:30
21:30	21:00	21:00	21:00
22:30	22:00	22:00	22:00
プログラム	プログラム	プログラム	プログラム
起床・朝の集い	起床・朝の集い	起床・朝の集い	起床・朝の集い
朝食作り・朝食	朝食作り・朝食	朝食作り・朝食	朝食作り・朝食
大学集合・アンケート・出発	ASEプログラム	北日高岳登山	撤収作業 清掃活動
バス移動	昼食	沙流川温泉・休憩	昼食
キャンプ場到着・開講式	ASEプログラム	夕食コンテスト	最終ふりかえり
写真撮影・アイスブレイキング	夕食作り	スタンツ・全体ふりかえり	閉講式・バス出発
テント・タープ設営	夕食・片付け	班別ふりかえり	移動
ピーニング	夕食・片付け	就寝	到着・アンケート・解散
夕食作り	入浴		
班別ふりかえり	班別ふりかえり		
就寝	就寝		

レクリエーション大会、夕食コンテスト、課題解決能力やリーダーシップの向上を目的としたASE (Action Socialization Experience) プログラム、自然と親しむ機会である登山活動など、多くのプログラムを実施している。履修人数の都合上、履修した学生を前半組と後半組に分け、同様のプログラムを設定している。なお、当該調査実施年の実習においては、前半組3日目の午前中が豪雨により、レクリエーション大会に変更され、午後から軽登山活動を行った。その他、前半後半はほぼ同様の流れで実施された(表2)。

班編成は1班6-7人の男女混合班とし、各班には事前にトレーニングを受けた上級生をキャンプカウンセラーとして配置し、野外活動のサポートや日々のふりかえり活動など、グループの成長を促す働きかけを適宜行った。

当該実習の運営体制は、キャンプディレクター、プログラムディレクター、マネジメントディレクター、医療スタッフを教員が担当し、プログラムスタッフやキャンプカウンセラー、マネジメントスタッフとして「野外教育指導演習」を履修する3年生及び、有志で集まった4年生が担っている。なお、当該実習の特徴として、学生スタッフが中心になって、実習の企画や運営、指導、安全管理を行っている事が挙げられる。教員は学生に対して適宜助言や指導を行い、実習の質を担保する働きかけを行っているが、実習運営の中心的な存在として学生スタッフが活動している。

3. 調査内容

3.1. 社会人基礎力

本研究では経済産業省が示した「社会人基礎力」尺度を採択することとした²⁾。経済産

業省が示す「社会人基礎力」の尺度は、今まで多くの研究で調査尺度として用いられ妥当性が得られており、江口¹⁰⁾の研究によって「チームで働く力」の下位因子である「規律性」を除いた11項目において、信頼性が得られた事が報告されている為、本研究の分析に採用することとした。回答形式は「非常に当てはまる」(6点)から「全く当てはまらない」(1点)までの6段階で評定するよう求めた。社会人基礎力の調査は、pre, post, post1の計三回行った。

3.2. 実習満足度

実習に対してどの程度満足したのか、また満足度が社会人基礎力の変容に関わっているのかを明らかにするために、実習の満足度調査を行った。実習の満足度に関しては、「この実習は楽しかった」というような、実習そのものの満足感に関する内容、「この実習の体験はこれからの生活に役立つ」といったような学びに関する内容、「火起こしはたのしかった」というような具体的なプログラム内容に関する内容、の3つの観点から調査を行った。調査項目は、全部で13項目である。なお、項目は野外教育を専門とする教員、大学院生と確認し、採択した。回答形式は、「非常に当てはまる」(6点)から「全く当てはまらない」(1点)の6段階によって評価するよう求めた。実習満足度の調査は、postの1回のみ調査を行った。

3.3. 課題価値尺度

本実習に対して、どのような価値を持って参加しているのかを明らかにすると共に、実習へ取り組む意識の違いによって社会人基礎

力の変容が異なるのかを明らかにするため、伊田¹¹⁾が作成した「課題価値測定尺度」を用いて質問紙調査を実施した。この尺度は、学習することの楽しさや面白さを表す「興味価値」、ある内容を学習する事で自分自身が望ましいと考える自己像を獲得できるという「私的獲得価値」、その内容を学習する事が他者から見て望ましいと考える「公的獲得価値」、学習内容が就職や試験で合格するために必要であるという「制度的利用価値」、学習内容が職業的な実践において役立つという「実践的利用価値」の5つの観点に関して調査が可能である。回答形式は、「非常に当てはまる」(7点)から「当てはまらない」(1点)の7段階によって評価するよう求めた。課題価値に関する調査は、preの1回のみ調査を行った。

3.4. プログラム調査

社会人基礎力の育成に影響したプログラムを検討するために、プログラム調査を行った。「野外教育実習のプログラム、実習生活の中で以下の諸能力について、身に付くきっかけとなった、もしくは身に着けるのに役立つと思うプログラムを記入し、その理由を書いてください」という質問の後、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力の能力因子の説明文を記載し、それぞれの能力欄に、身に付

くきっかけ、身に着けるのに役立つと思うプログラム名もしくは生活名を記入し、その理由を記載してもらう形式を取った。

4. 分析方法

4.1. 社会人基礎力

分析に先立ち、記述統計量として質問項目から上位因子、下位因子毎に合計を求め、それを基に平均値と標準偏差を算出した。続いて、実習による社会人基礎力の変容を明らかにするために、事前(pre)、事後(post)、1ヵ月後(post1)での反復測定1要因分散分析を行い、主効果が見られた因子にはBonferroniの多重比較をおこなった。さらに満足度、課題価値の違いによる社会人基礎力の変容の違いを明らかにするために、それぞれの属性と調査期間(以下:期間)で、2要因混合計画による分散分析を行った(満足度×期間、課題価値×期間)。交互作用が見られた項目には単純主効果の検定、多重比較を行い、主効果のみが見られた項目には多重比較を行った。全ての有意水準は5%以下とした。なお満足度、課題価値に関しては、平均値よりも高い値の者を満足度高群、課題価値高群、平均値よりも低い値の者を満足度低群、課題価値低群として扱った。全ての分析は統計ソフトIBM SPSS Statistics 22を使用した。

表3 社会人基礎力の変容(参加者全体)

因子名	Pre		Post		Post1		F 値	多重比較
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
社会人基礎力全体	4.30	0.57	4.96	0.62	4.57	0.54	80.25 ***	Pre < Post, Pre < Post1, Post > Post1
前に踏み出す力	4.20	0.66	4.97	0.68	4.52	0.63	71.82 ***	Pre < Post, Pre < Post1, Post > Post1
考え抜く力	4.16	0.70	4.90	0.73	4.46	0.62	59.77 ***	Pre < Post, Pre < Post1, Post > Post1
チームで働く力	4.27	0.64	4.93	0.68	4.53	0.60	57.25 ***	Pre < Post, Pre < Post1, Post > Post1

*** $p < .001$

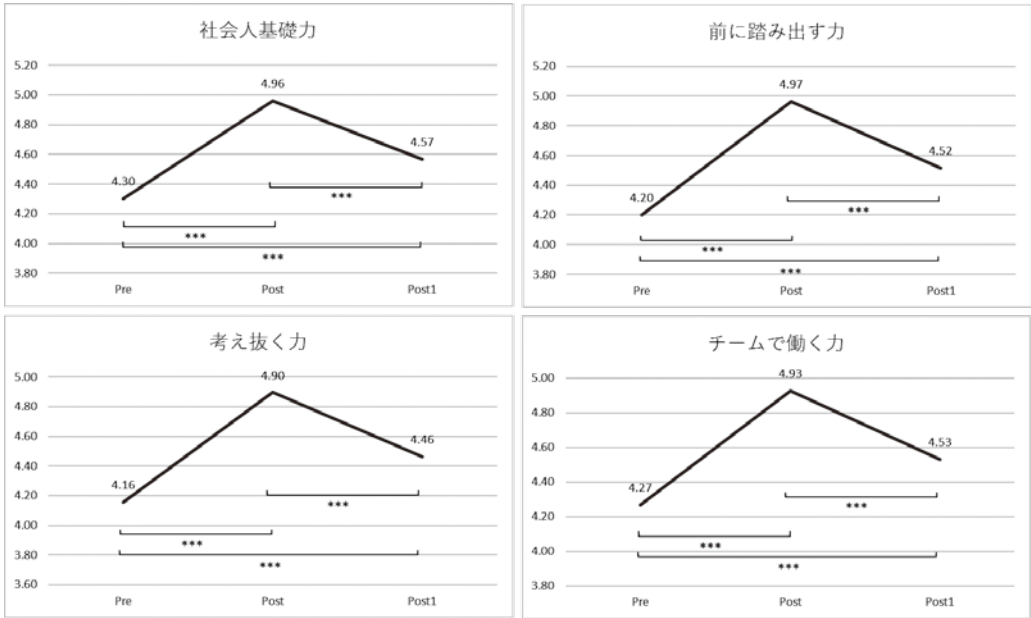


図2 社会人基礎力の変容（参加者全体）

表4 社会人基礎力の変容（満足度別）

		結果（高：低＝47：49）						2要因分散分析		
因子	満足度	pre		post		post1		期間	高低	交互作用
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	F 値	F 値	F 値
社会人基礎力	高	4.42	0.54	5.27	0.53	4.76	0.54	86.29 ***	18.30 ***	6.98 **
	低	4.19	0.59	4.67	0.57	4.39	0.47			
前に踏み出す力	高	4.33	0.61	5.34	0.56	4.77	0.61	77.60 ***	24.36 ***	7.38 **
	低	4.08	0.68	4.61	0.60	4.27	0.56			
考え抜く力	高	4.26	0.69	5.21	0.61	4.62	0.65	63.18 ***	11.78 **	5.28 **
	低	4.05	0.71	4.59	0.71	4.31	0.56			
チームで働く力	高	4.37	0.62	5.20	0.61	4.69	0.59	59.72 ***	11.78 **	4.07 †
	低	4.17	0.65	4.66	0.65	4.38	0.57			

****p* < .001, ***p* < .01, †*p* < .10

4. 2. プログラム調査

社会人基礎力を構成する能力因子毎に、記入されたプログラム名もしくは生活名の単純集計を行った。記入した具体的な理由については、分析に係る時間・人材が確保できず、著者のみの分析であると、分析過程に一貫性及び確実性が担保できないため、本研究においては扱わない事とした。

5. 結 果

5. 1. 社会人基礎力の変容

対象者全体（*n*=98）の pre,post,post1にかけての社会人基礎力得点の変化を、各能力因子の平均値を用いて、反復測定 の 1 要因分散分析を行った（表3，図2）。その結果、社会人基礎力すべての能力因子でpreからpostにかけて有意な向上、postからpost1に

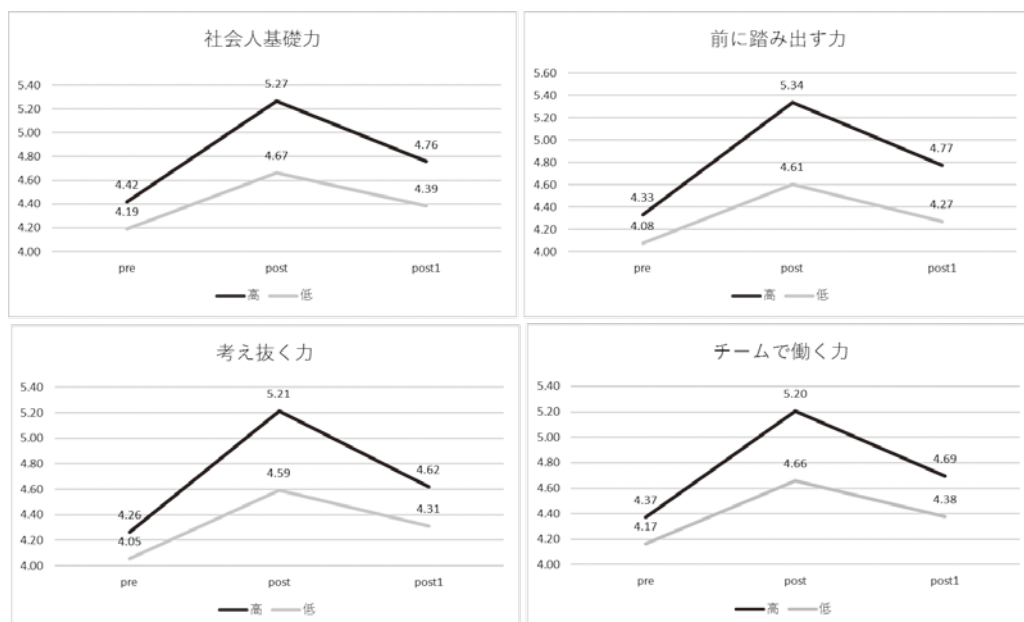


図3 社会人基礎力の変容（満足度別）

表5 社会人基礎力の変容（課題価値別）

因子	満足度	結果（高：低＝47：49）						2要因分散分析		
		pre		post		post1		期間	高低	交互作用
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	F値	F値	F値
社会人基礎力	高	4.50	0.54	5.18	0.57	4.80	0.51	78.16 ***	-29.82 ***	-0.39
	低	4.06	0.52	4.68	0.58	4.28	0.42			
前に踏み出す力	高	4.42	0.63	5.16	0.68	4.76	0.62	71.21 ***	-22.29 ***	-0.31
	低	3.93	0.60	4.73	0.62	4.23	0.52			
考え抜く力	高	4.30	0.72	5.17	0.67	4.69	0.58	57.61 ***	-19.74 ***	-0.08 †
	低	3.98	0.64	4.56	0.67	4.19	0.57			
チームで働く力	高	4.49	0.61	5.16	0.61	4.79	0.57	55.97 ***	-29.69 ***	-0.17
	低	4.00	0.57	4.64	0.66	4.22	0.47			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, † $p < .10$

かけて有意な低下が認められた。また、preからpost1にかけても有意な向上が認められた（社会人基礎力： $F[2.96]=80.25, p<.001$, 前に踏み出す力： $F[2.96]=71.82, p<.001$, 考え抜く力 $F[2.96]=59.77, p<.001$, チームで働く力 $F[2.96]=57.25, p<.001$ ）。

5.2. 満足度の違いによる社会人基礎力の変容

満足度に関する項目を合計し、平均値を算出した（ $M=5.19$ ）。平均値より高い値の者を満足度高群（ $M=5.70, SD=.24$ ），低い値の者を満足度低群（ $M=4.70, SD=.45$ ）として、満足度高低と期間の2要因混合計画の分散分析を行った（表4，図3）。その結果，社会人基礎力の前に踏み出す力と考え抜く力において交互作用が認められ，チームで働く力においても有意傾向が認めら

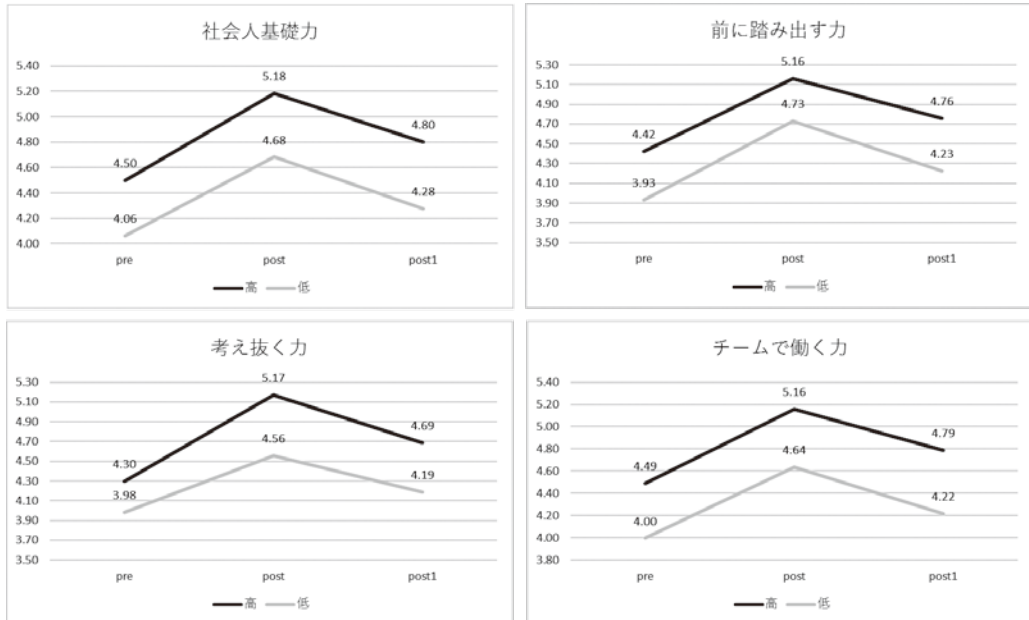


図4 社会人基礎力の変容 (課題価値別)

表6 能力因子別プログラム記入数

前に踏み出す力	記入数	考え抜く力	記入数	チームで働く力	記入数
ASE	36	ASE	65	ASE	27
野外炊事	30	夕食コンテスト	18	野外炊事	20
登山	14	ふりかえり活動	7	夕食コンテスト	19
テント・タープ設営	8	野外炊事	5	登山	18
キャンプ生活	5	レクリエーション大会	3	ふりかえり活動	13
アイスブレイキング	4	登山	2	実習生活全体	7
夕食コンテスト	3	実習生活全体	1	レクリエーション大会	5
キャンプファイヤー	2	テント・タープ設営	1	朝の集い	1
レクリエーション大会	2			清掃活動	1

れる結果となった。つまり満足度の高い群のほうが、実習を通して社会人基礎力をより向上させていることが明らかになった (社会人基礎力: $F[2.96]=6.98, p<.01$, 前に踏み出す力: $F[2.96]=7.38, p<.01$, 考え抜く力 $F[2.96]=5.28, p<.01$, チームで働く力 $F[2.96]=4.07, p<.10$)。しかしながら、両群共に一ヵ月後の調査において社会人基礎力得点の低下が見られる結果となった。

5.3. 課題価値の違いによる社会人基礎力の変容

課題価値に関する項目を合計し、平均値を算出した ($M=5.03$)。平均値より高い値の者を課題価値高群 ($M=5.70, SD=.51$)、低い値の者を満足度低群 ($M=4.22, SD=.59$) として、課題価値高低と期間の2要因混合計画の分散分析を行った (表5, 図4)。その結果、考え抜く力において交互作用に有意傾向が見られた (考え抜く力 $F[2.96]=.08, p<.10$)。その

他、前に踏み出す力、チームで働く力に関しては、課題価値高低及び期間に主効果が認められた。つまり課題価値を高く評価した者ほど、社会人基礎力に関する得点を高く評価しつつも、両群共に実習を通して、社会人基礎力を高めている事が明らかになった。しかしながら、両群共に、一ヵ月後の調査において得点の低下が見られる結果となった。

5. 4. プログラム調査

社会人基礎力を構成する能力因子毎に、記入されたプログラム名もしくは生活名の単純集計を行った（表6）。その結果、前に踏み出す力の育成へ影響したと思うプログラムは、「ASEプログラム」、「野外炊事」、「登山活動」の3つのプログラムに記入数が多い結果となった。続いて、考え抜く力の育成へ影響したと思うプログラムは、「ASEプログラム」が非常に多く記入され、続いて「夕食コンテスト」が多く記入される結果となった。最後にチームで働く力の育成へ影響したと思うプログラムは、「ASEプログラム」、「野外炊事」、「夕食コンテスト」、「登山活動」の4つが多く記入される結果となった。

6. 考 察

6. 1. 社会人基礎力の変容

本研究の目的は大学野外教育実習参加者を対象に、自然体験活動が社会人基礎力の変容に及ぼす影響について明らかにすることであった。

実習参加者全体の社会人基礎力の変容は、すべての能力因子でpreからpostにかけて有意な向上、postからpost1にかけて有意な低下

が認められる結果であった。近藤らは¹²⁾、社会人基礎力の育成方法について、自ら調べたり、発表したりする能動型の授業形態にするといったアクティブ・ラーニングの割合を増やすことや、アクティブ・ラーニングを取り入れた講義を行うことが必要であると提言している。さらに手嶋は¹³⁾、社会人基礎力に影響を及ぼすポイントとして、①楽しく大変な事、②グループワークによる活動である事、③長い活動の期間である事、④段階的にできていく（成長する）様子が把握できる事、⑤興味関心の共有化の5つを挙げている。これらの社会人基礎力育成のポイントを当該野外教育実習に置き換えてみると、実習生は実習中、自ら考え行動することが基本である事を実習教員から意識付けられており、各班に設置されているキャンパカウンセラーに関しても、実習生のサポートをするという立場を一貫しており、自ら考え行動することを働きかける指導を行っている。さらに実習期間中は常に共同生活である事、生活そのものが非日常体験でありストレスを感じやすい事、ASEプログラムや登山活動といった課題に挑戦する機会があること、スタンツやふりかえり活動で個人・各班の想いや感じた事を共有する機会があることなど、社会人基礎力育成に有効であるポイントに対して図らずとも合致している事がわかる。この事から、当該野外教育実習が社会人基礎力の育成に非常に有効であった事が推察され、ひいては自然体験活動の特性である、共同生活や非日常生活であることは社会人基礎力を育成させるポイントを作りやすい状況であると言えるだろう。

一方で、1ヶ月後の調査において、社会人基礎力得点が実習直後から有意に低下してい

るが、実習直前の得点と比較すると向上していることから、社会人基礎力の育成に関して一定の効果が得られたものと捉えることができるだろう。しかし、今後は向上した社会人基礎力をどのように維持していくかを検討していく必要がある。青木ら⁴⁾は、キャンプ体験によって向上した社会人基礎力が1ヶ月後の調査においても、下位因子の「計画力」以外すべての因子の得点が維持されたことから、日常生活でも活かせる能力は向上効果が維持されやすいのではないかと報告している。この事からも、体験した事を日常生活にどう活かしていくか、やどう活かされているのかなどを、ふりかえり活動やレポートなどで意識させる活動を取り入れる事で、改善されるのではないだろうか。今後さらに検討していく必要があるだろう。

6. 2. 満足度の違い及び、課題価値の違いによる社会人基礎力の変容

満足度の違い、課題価値の違いによる社会人基礎力の変容については、満足度が高い群のほうが社会人基礎力得点をより高く向上させている結果となり、課題価値についても高群のほうが、もともと社会人基礎力の得点が高い数値を示し、考え抜く力においては高群のほうがより高く社会人基礎力得点を向上させている結果となった。松村¹⁴⁾や黒島ら¹⁵⁾、井澤ら¹⁶⁾、徳田は¹⁷⁾、キャンプでの多種多様なプログラムをやり遂げる達成感が自己肯定力を身に着ける事や、期間を通じて満足感や達成感が変化しつつも、次第に自己肯定感が高まり結果として自己成長にポジティブな影響を及ぼす事、満足度が自分自身への気付きに繋がる事、満足度が高い参加者ほど、キャ

ンプ活動を通して生きる力を向上させていることを報告している。本研究においても、これらの先行研究同様の結果が見られた事から、満足度が高いことは社会人基礎力に対して、ポジティブな影響を及ぼすと言えるだろう。

さらに徳田¹⁷⁾は、満足度が高かった群のほうが、もともと生きる力得点が高かったことから、キャンプに対するレディネス（学習者の心身の準備状態）が生きる力の育成やキャンプ満足度に関係しているのではないかと推察している。本研究で調査した課題価値は、学習者が授業や課題に対して、どの程度価値を感じているかを明らかにするものであり、本研究に合わせて考えると、野外教育実習に対してどの程度価値を感じているかを表している。その点では野外教育実習に価値を感じている者ほど、実習に対する心身の準備状態が高いとも言えるだろう。以上の事から、課題価値をレディネスと捉えて考えると、本研究において、レディネスが高かった群のほうが、もともと社会人基礎力を高く評価しており、低い群に比べると高い次元で社会人基礎力得点が変動している。さらに、満足度の違いによる社会人基礎力の変容と比較すると、それぞれの高群、低群はほぼ同様の社会人基礎力の変容過程を示しており、高群のほうが高い次元で社会人基礎力の変容している。この結果からも、レディネスが社会人基礎力の変容及び、満足度と何らかの関係性があることが示唆される。今後相関分析や重回帰分析などの視点から、関係性についてより深くアプローチしていく必要があるだろう。

6. 3. プログラム調査

社会人基礎力の育成に影響を及ぼしたプロ

グラムを検討するために調査を行ったところ、社会人基礎力の諸能力に関して、ASEプログラム、野外炊事、夕食コンテスト、登山活動が強く影響していることが示唆される結果となった。特に、ASEプログラムは全ての能力因子で多く記入される結果となった。ASE (Action Socialization Experience) は、「社会性を育成する実際体験」とも呼ばれ、個人では解決できない課題に対して、グループのメンバー同士が協力しながら課題を解決していく活動とされている^{18),19)}。具体的な理由をいくつか見てみると、「ASEプログラムは班の人達と協力しなければならないもので、一つのプログラムに対して現状分析や目的や課題が明らかであり、その解決に向けたプロセスがあったと思う」、「自然の中で様々な課題に取り組む中で、最初は絶対に上手くいかない事ばかりだった。でもただ同じ失敗を繰り返すのではなく、失敗する度に何でできないのかを一人ひとりが考え、疑問を解決していく事ができたから」、「どうやったらクリアできるか、それをみんなで考える機会が多かった。みんなの力を合わせればどんどんやっていった」といった記入が多く見られた。この事からも、協力した体験や、課題解決に向けて一人ひとりが主体的に考えた体験などが、社会人基礎力育成に影響を及ぼしていた事が推察できる。大杉らは²⁰⁾、集団凝集性、チーム効力感、自己効力感に登山とASEプログラムが3変数全てに強く影響している事を示唆しており、ASEプログラムを通した努力や達成、協力、一体感、コミュニケーションといった要因がそれぞれの変数に影響したのではないかと述べている。本研究においても、記述内容からそれらの要因を体験した

事が十分に読み取れる。

さらに、社会人基礎力に影響したプログラムとして、野外炊事、夕食コンテストといった調理活動に関する記入が多く見られた。記入内容を見てみると、「決められた時間の中で手早く協力して作らなければいけない為、自然とチームで働く力、人間関係を養う事ができた」、「失敗した事をそのままにしないで、その日の内に班で話し合い、役割分担など工夫して取り組んだから」、「各班で与えられた食材で料理を作るという課題、目的に対して一人ひとりが考え、班で答えを出していた」といった記入内容が多く見られた。これらの記入内容から、先にも述べた社会人基礎力育成の5つのポイント¹³⁾、①楽しく大変な事、②グループワークによる活動である事、③長い活動の期間である事、④段階的にできていく(成長する)様子が把握できる事、⑤興味関心の共有化がプログラムを通して、自然と行われている事がわかる。野外炊事は一見して派手なプログラムでは無いものの、プログラムの中で必要となる、協力や役割分担、料理ができた際の達成感などが、社会人基礎力の育成に有効である事が推察できる。

しかしながら、本研究において社会人基礎力の育成へ影響したプログラムの要因に関して、推察に留まっていることから、今後記述内容をテキストマイニングやKJ法といった視点から詳細に分析し、社会人基礎力の育成に影響する要因を明らかにしていきたい。

7. 結 論

- 1) 自然体験活動を通して、社会人基礎力が向上する事が明らかになった。

- 2) 自然体験活動に対する満足度の高い者のほうが、社会人基礎力をより高く向上させることが明らかになった。
- 3) 課題価値を高く感じているものほど、高い次元で社会人基礎力を変容させていることが明らかになった。一方で、変容の仕方に差異は見られず、両群共に自然体験活動を通して社会人基礎力を向上させていることが明らかになった。
- 4) 社会人基礎力の育成には、ASEプログラム、野外炊事、登山活動が特に有効であることが示唆された。

8. 文 献

- 1) 経済産業省 (2010) 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査, <http://www.meti.go>.
- 2) 経済産業省 (2006) 社会人基礎力に関する研究会-「中間とりまとめ」-, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukangaiyo.pdf>.
- 3) 築山泰典・神野賢治 (2008) 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討. 福岡大学スポーツ科学研究, 39(1): 13-26.
- 4) 青木康太郎・粥川道子・杉岡品子 (2012) キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第3号: 27-39.
- 5) 江口達也・池島明子・福田芳則 (2012) 教育キャンプが参加者の社会人基礎力と生きる力に及ぼす影響 -社会人基礎力と生きる力の関係に着目して-. 大阪体育大学紀要, 第43巻: 67-76.
- 6) 斉藤 寧 (2008) 「社会人基礎力」の展開 -大学での展開への若干の提言-. 比治山大学短期大学部紀要, 第43号: 43-59.
- 7) 斉藤 寧 (2009) 「社会人基礎力」の詳細定義 -大学での具体的展開への若干の提言-. 比治山大学短期大学部紀要, 第44号: 21-29.
- 8) 斉藤 寧 (2010) 「社会人基礎力」の詳細展開 -能力要素の「熟達度」の雛形作成とその活用-. 比治山大学短期大学部紀要, 第45号: 15-24.
- 9) 斉藤 寧 (2011) 「社会人基礎力」の活用展開 -卒業研究のアンケート項目に活用-. 比治山大学短期大学部紀要, 第46号: 1-9.
- 10) 江口達也 (2013) 教育キャンプ参加が社会人基礎力の変容に及ぼす影響. 大阪体育大学修士論文 (未公刊).
- 11) 伊田勝憲 (2001) 課題価値評定尺度作成の試み. 名古屋大学大学院発達科学研究科紀要. 心理発達科学48巻: 83-95.
- 12) 近藤真唯・高野昭雄・相良陽一郎・中村晃 (2014) 社会人基礎力をつける教育に関する

- る研究. 千葉商大紀要, 52(1) : 189-199.
- 13) 手嶋尚人 (2013) 造形表現の社会人基礎力に与える可能性について -空間デザインのグループワークを通して-. 東京家政大学研究紀要, 第53集 : 75-84.
- 14) 松村純子 (2001) 「生きる力を育む, 長期自然体験プログラム『妙高キッズアドベンチャ-』」～「発見」をねらいとした効果的な活動プログラムを目指して～国立オリンピック記念青少年総合センター-研究紀要, 創刊号 : 55-64.
- 15) 黒島直人・服部英二・吉田章・林丈 (2009) 無人島キャンプ体験が青年に及ぼす教育効果について, 国立青少年教育振興機構研究紀要, 第9号 : 133-142.
- 16) 井澤悠樹・松永敬子 (2011) マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究-自己概念の変容とプログラム満足度による少人数プログラムの検証-, 大阪女学院大学紀要, 8号 : 216-226.
- 17) 徳田真彦, 伊原久美子, 飯田輝, 久田竜平, 高橋宏斗, 土屋祐睦: 小中学生を対象としたキャンプ活動が生きる力に及ぼす影響-性別, 学校段階, キャンプ満足度に着目して-, 大阪体育学研究第54巻1-18.
- 18) 星野敏男・金子和正 (2011) : 野外教育の理論と実践, 杏林書院: 81-86.
- 19) 星野敏男・金子和正 (2014) : 冒険教育の理論と実践, 杏林書院: 17-18.
- 20) 大杉夏葉 (2013) : 教育キャンプが参加者の自己効力感・チーム効力感・集団凝集性に及ぼす影響, 大阪体育大学大学院修士論文 (未公刊).